

ホヤの遺伝子解明へ

東北大など 研究グループ D N A チ ッ プ に 活 用

参加 業界に
呼びか

【仙台】酒の肴(さかな)。ホヤから新産業を。東北大学金属材料研究所、同加齢医学研究所の学際研究グループは、ホヤの遺伝子構造を解明し、その成果をDNAチップなどに活用する。「シエネティック・デバイス研究開発プロジェクト」構想をまとめ、地元経済界などにプロジェクト参画の呼びかけを始めた。研究グループは通産省などと資金面の交渉に入っており、5万円で約100億円の研究費を見込んでいる。

海のバイナチップルとも呼ばれるホヤは三陸沿岸の特産物の一つ。ホヤは脊椎(せきつい)動物の祖先とされ、その遺伝子構造はヒトより複雑でない分、ヒトへのアプローチに早くつながらる。その機能を突き止めることで、ブレインコンピュターや環境・医薬分野などへの応用を図る考え。遺伝子工学の世界はヒトゲノム計画、イネゲノム計画など大規模な研究が進んでいるがホヤ遺伝子の解明は今回が初になるという。

プロジェクトリーダーは東北大金研の川添良幸教授、同加齢研の佐竹正延教授。さらに大石道夫かずさDNA研究所所長、佐藤矩行京都大教授、道端齋広島大教授らなど、全国規模で協力体制をとる。プロジェクト事務局は加齢研内の青葉脳画像リサーチセンター(022・301・3077)に設置した。

トの神経、脳などへの有用な情報採取や1ヶ月でCD3兆枚分の情報が記憶できるなどの性能を持つシエネティックデバイスを目指す。東北にはこれまで遺伝子工学系の拠点施設がなく、今回のプロジェクト実現は関係者の期待が高い。プロジェクト事務局では「たとえ、地元酒蔵などの持つ酵母の遺伝子分析や生物系特許取得などにも対応していきたい」と、地元酒造組合などのプロジェクト参画を期待している。